

佐倉時代の尚中

篠丸頼彦

順天堂第二代の堂主佐藤尚中は初代の父泰然と共に佐倉での順天堂の経営と佐倉堀田藩の医政に尽すこと二十七年の永きに亘り、年齢からは十七歳から四十二歳迄の壮年期で血氣盛んな時代に当る。尚中が幕末明治初期に際し日本の近代医学の発達に貢献したことは、小川鼎三先生を主軸としての編集「順天堂史上巻」でも詳細に述べられている。そこでこの際は主として尚中の安政六年家督相続以降、明治二年東京に出る迄の十一年間、佐倉での概要を先ず述べる。次に尚中の学問の基礎となった漢学の教養の拠って来るところ、また尚中をとりまく後援者と思われる者のうちの有力であったと見られる藩校成徳書院奉行の金井右膳と豪農大河平兵衛についてその次第を述べることにする。

一 佐倉時代の概要

蘭医佐藤泰然（一八〇四—一七四）は長崎遊学から帰ってより江戸薬研堀で医を開業し、江戸の蘭方外科医として有名となっていたが、急に佐倉の堀田氏の城下に移住することとなった。そのわけは天保十二年（一八四一）泰然の父藤佐の生国庄内の藩主酒井氏の転封引留運動を行い、領民の直訴歎願に、父と共に泰然が煽動したという疑いに、泰然・藤佐が老中首座水野忠邦に取り調べをうけたことに起因すると見られている。そこで江戸に近い佐倉に逃避ということがいわれる。

それは佐倉城主堀田正睦は開明的な藩主であり、また藩校医学所では蘭医学を講義しているし(天保一三年より)砲術其他にも蘭学をとりいれている等もその直接の事情と見られよう。かくして天保一四年八月、泰然は佐倉城大手門内広小路の渡辺弥一兵衛宅に一先ず落ちついたがこの時、尚中も随行している。この渡辺氏は堀田氏の太祖正盛以来庶藩迄仕えた譜代の重臣である。上層藩士五、六名で構成(江戸と佐倉で)する年寄役をつとめている。また弥一兵衛は文政末年、蘭医の外科手術をうけ、蘭方医学を高く評価していたものである。この渡辺氏が何かと世話をしたことが泰然の将来に幸先よいものとなった。

本町に落ちつく 二ヶ月の後渡辺家の世話を辞して弥一兵衛の計らいで城下の外れで西方の佐倉本町に居を定めた。その位置は成田街道沿いで、現佐倉高校校門前を通る、バイパスの交叉点の位置の南側である。この本町の地は城下の商人町である佐倉新町に続く台地で馬の背のような南北に斜面を持つ細長い地勢である。この本町の地は天正一八年下総国北部に君臨した千葉氏の居城たる酒々井の根古谷城が小田原の北條に攻め落され、徳川家康の治下に入った際、佐倉領統治の拠点を酒々井の本佐倉に移し、その家臣団の城下にと計画し、旧来の大蛇村の郷村を東西に帯のように割地したものである。そこに武家屋敷、商人街を割当てた。そこで東西の道路の両側を短冊形に割り、奥行五〇間(六〇米前後)間口一五間(二〇米前後)とした。

順天堂の建物 泰然の屋敷地は初めは道路の南側で、嘉永六年の測量術による実測絵図では間口一五間、奥行五〇間で天保十四年一〇月、順天堂塾を称したのはこの地である。この初めの順天堂の場所には泰然時代の嘉永六年隠居迄の一七年間ここにいた。この前半時代の施設等は史料では見られない。尤、明治初年に順天堂の建物を買って(八畳間床付)移築した記録もあるので或は明治五年頃迄(この年泰然死去)そのままになっていて、多くの遊学生の宿舎にあてたものかとも推定される。のち、初めの順天堂地から嘉永五年、街道を挟んで反対側、即ち本町北側に病院と塾の施設の建築に着手し、翌六年新築完工し新建築に引移った。この年から明治二年、尚中の東京移住の十一年間が尚中の佐倉住いの後半に当

り第二代目の堂主の時代である。この安政六年には尚中が泰然から家督をうけている。この新築が安政六年であることは、先年佐倉市教育委員会が文化財指定にからんでの資料調査の際、屋根裏から次のような棟札が発見された。

(表)

彦狹智命	安政五戊午年
手置帆負命	天地長久
天思兼命	我此土安穩
	十月二十日

(裏)

大棟梁直弥村	新関	庄兵衛
大工棟梁	本町新次郎	
同	弥勒町繁蔵	
木挽棟梁	本佐倉町庄蔵	
同	直弥村興吉	

なおこの新築移転は泰然の隠居、尚中の相続に関係あるものと思われる。

新たに移った場所は前のところの反対側で、字本町北側、間口二二間・奥行四四間（後に拡張して七九間）の場所である。新築時から玄関の式台の正面に八畳続いて北に一〇畳、その右側が板の間八畳、更に続いて八畳、正面玄関八畳の東隣が土間。現在この二部屋と土間は取除かれた。その左側（西）は板張の廊下を隔てて一二畳半と七畳半の室が診療と手術に充てられた。ここに毛氈を敷き金盥を置き外科手術をしたと思われる。右記の玄関附母屋の南側即ち門を入れて左側に瓦

葺の平家建（一部中階付）が残っているが、これが尚中の住家で前記した母屋と同時代のものと思われる。養父泰然は移転前の最初の建物に住んだものと推定するがどうであろうか。恐らくは元治元年（一八六四）江戸の林洞海方に滞在を藩へ願ひ出るまでここに住んだものと思われる。正門を入れて右側には二階建疊敷で塾生の学習に充てた室が上下にあって、ここには常時ゾーフハルマ（蘭和辞書）を備え置き、塾生が昼夜交替でこれから筆写したという。

本町の自然環境 泰然の五男童は嘉永三年、初めにあった順天堂内で生れ育ったが、少年の頃からの往時を回顧して『今は昔の記』の小扁を刊行している。その一部の大意に

「本町は場末にて農業を兼ねたる小商人の家百軒足らず上下の二町に分かれ……。部落の背後は田畠山林なれば狐多く此に棲み予が父の家建築の時など普請場に陥穽を作り狐を捕へたる様なれば狐に憑かれたといふ人は甚だ少なからざりき。（ヒステリー症、月経不順にて脳に異状を呈せる等）……皆子供の時より狐の怪異談を聞きたるより起る病氣なり……。然るに郷党は真に狐の所為とし之を逐ひ払ふとて蕃椒を焼き患者を燻する等の事あり、嘗て予が家に仕へたる下婢は自家に帰りたる後、之が為め終に死に抵りたり。後に聞けば此女乳糜管閉塞を患いて滋養物体中に入らず多食すればする程愈々憔悴するのみなりしに斯く見たる人々は扱こそ狐が体中に住みて食物を横奪すると覺えたれとて蕃椒燻しをかけ遂に燻殺したり……。」

順天堂の用地の佐倉本町は特に成田街道南沿いの一帯は樹林多く、稍々離れている鍋山には明治末に旧制県立佐倉中学校が大手門外から移転し工事開始の折などにも狐が多く、オサンギツネと呼ばれ近隣の話題ともなっていた。現在も順天堂の南方二百米の位置に鎮座する鎮守神明社の森は佐倉市指定の保存林となつているが、十数本ある大木の中には根元の径二米、最大三米近い樺の古木が勢よく空を掩い、往時に於ての一帯の面影をよく残している。

一 順天堂主並医学所教授として

家督相続、医学所教授に任 安政六年四月、父の泰然は願に依り隠居を許された。家督は尚中が嗣ぎ給人医師（十五人扶持）百石高の知行取に略相当）となる。この年、藩校医学所の改革が行われ、漢方と蘭方の対立を廃し嘉永二年以前の漢方・蘭方の並立に復し、蘭方医が漢方同様の取扱をうけた。さて、これよりさき、佐倉藩では天保の改革（同四年）を宣言したがそのうちに士風昂揚としての第一に「文武芸術の制」を令した。その核心たる「一術免許の制」を定めた。この制は古来藩士が死去の場合、家督相続者は家禄歩引（何割かを差引いて支給）のほか、新たに増引（さらに減額）を加えた。この対応として一術の免許を得たものには増引を免除したのでこれが文武の奨励等となった。そこで各分野の中で、医師は小学論語孟子のうち一部と「傷寒論」（古医書）が試験科目で漢方に限られていた。ところが安政六年七月の令で「蘭学修業済ト唱へ一術免許同様御取扱之定」として「兵学修業」と「蘭家医師増引御戻之定」の二部に分けて令した。後者の蘭方医の定は、

一、和蘭文典 ガラムマチカ シンタキス

一、リセランド人身窮理書 但インレーラング卒業

一、ヒュヘランド病理論

一、コンラデー病理書

右卒業之上

本道ハ

一、コンラデー内科書

一、モスト治療書内科部

右二部之類

外科ハ

一、セリユス外科書

一、オンセノートル手術書

一、モスト治療書外科部

右三部之類

眼科ハ

一、セリユス眼科部

一、モスト眼科部

右二部之類

産科ハ

一、ヒユス産科書之類

右之書之内、試業之節、訳文講義の内にて試相済、且又平常病用も相勤候ハ、増引御戻下さる可く候事。但文学之儀は人道之本務に候間蘭家医師ニ而も厚く相心掛られ可候事。

右記のように「蘭学修業済」のうちの蘭方医師学習内容の基準が明示されることとなった。従来の医学修業の一術免許の規定は漢方による者のみに適用された。それ故医学所の教授は漢方医から出、中里忠庵・仁庵父子、横田松溪、吉村立庵等が教授又は都講（助教授相当）となった。蘭方の方は楠木仙安が初め都講となり嘉永二年、仙安退任の後は西淳甫が都講となった。翌三年二月の年寄部屋日記（藩の日記）には「佐藤泰然、西淳甫と申し合わせて月並講義を致すよう仰せ出さる」とある。そこで前記安政六年の「定」に対応して蘭方の分野にも従来の漢方の制度規定と同じく教授を置くことになり、翌万延元年三月、尚中が成徳書院医学所教授（定員一名）に任ぜられた。

長崎遊学 尚中は安政六年家督相続、翌万延元年勿々藩校医学所教授となり、その用意もあつてか今流の言を借りれば充電の要もあつてか、同年暮長崎遊学に赴いた。この長崎行は前々からの計画であつたが、父泰然は反対でなかなか実現しなかつた。然し別稿のように佐倉藩の重臣金井右膳の蔭での尽力もあつて兎に角実現した。その経緯は金井氏宛の泰然自筆書状（万延元年九月二八日認）ほか一通、舜海（尚中）書状―同年十一月認ほか文久元年正月二七日認迄の七通、計九通（以上筆者蔵）へ順天堂史九九七―一〇二頁の付録資料に掲載してその詳細を知ることが出来る。右のうち泰然のものは尚中遊学に反対した心境、尚中の長崎より発した万延元年十二月二四日認のものは同月二日に着いてから泰然の實子で義兄の松本良順の計らいで勿々ボンベに面会した模様がよくわかる。これらの書状は尚中の長崎滞在期を知り得る重要な史料といえよう。遊学は一ヶ年余であるが文久二年三月十四日佐倉に帰着した。

長崎遊学後の順天堂経営 寺送り証文のこと―順天堂では泰然が病人より手術承諾書を求め、安政二年四月二二日付の証文が残っていることは佐藤恒二の発表があり、山崎佐博士の論考にも詳しいことは順天堂史一二八頁以下に述べられている。尚中はまた寺送り証文を用意させている。手術の結果万一死亡した場合、佐倉で埋葬させている。公的の記録では「年寄部屋日記―佐倉藩」の文久二年八月八日の記事に、江戸浅草住の借地清兵衛伴林蔵が死亡し、近くの大蛇村東慶院に埋葬したのが初見で、慶応二年五月二五日、尚中より藩庁への達し

「……下野国阿蘇郡赤見村市三病氣ニ付、療養の為私方え罷越候間、桶屋庄作方え差留手当介抱任り候得共、素より大病の上、疲労相加里養生相叶わず今晝七ツ半時死去仕候。然ル処万一相果候ハ、当所え取置申すべき覚悟にて国元出立之砌、寺送村送手形用意持参仕候間当所取置呉候様差添罷在候。当人叔父常蔵並当人妻頼ニ付、其意に任せ、大陀村東慶院え還合の上、埋葬仕候由」

と記されている。右の達は慶応四年五月迄の記載が十三件で殆どは東慶院に埋葬（蓮蔵院一件）し、現在同寺は廃寺となり墓地のみ残り整理して一ヶ所に無縁仏として纏められている。

三 佐倉藩医政改革の中心となる

医学所の職掌を改正す 尚中は万延元年藩校医学所の教授就任後七年目の慶応二年佐倉藩医政改革の中心となり大改革を行った。その手始めとして慶応二年十月二三日藩内への席触にて医政改革を触れ出した。その申渡は藩校医学所ならびに御医師中(藩医)から漢方を廃止するとの宣言である。ただし町医はこれまで通り漢方にも差支えないとした。この慶応の改革は軍政と医政両面改正の一部である。そこで尚中は同年十二月七日付で歩兵隊との御用兼務を達せられた。これは軍政と医政が一体のものとし、軍医の総帥ともいふべき地位である。次に医界の職掌の改正では歩兵隊御用引持を達せられた。時は同日の同年十二月七日である。

天保七年、成徳書院開校以来その附属として医学を教授し、後また診療を行った医学所は今回の改正でその職制が根本的に改正された。これまでの医学所の師役には教授・都講(助教授相当)、正授読(講師・助手相当)で学政は成徳書院奉行の統べる所であったが、嘉永三年以後は医学所総管を置き医学所に関する限り一切を統理した。(初代総管は金井右膳一別掲)。この教授等の制が今回の改革で廃されて職制を改めて一等医師・二等医師・三等医師の制を布いた。一等医師はこれまでの総管兼教授、二等医師は都講、三等医師は正授読に該当する。その一等医師にはこの度の改正の中心となった尚中が任せられた(二年十月七日)。これらの準備を経て同年十二月七日、尚中以下が補任された。翌三年一月には二等医師浜野了元が一等医師代理を命ぜられ、また同年中には岡本道庵(尚中養子で二世舜海)佐藤進(初め三等医師)がそれぞれ二等医師に昇任した。尚中への辞令は

「此度医政御改革ニ付、席御側御用人ニ成シ下サレ、第一等医師仰セ付ラレ候、入念相勤ムベク候」。なお同日「……御役高拾人扶持下シ置カレ、都合三拾人扶持高ニ成シ下サレ候」である。

因に側用人は慶応二年改年限帳では全部で十二名、百五拾高で、尚中は役高合せて三拾人扶持で知行取二百五拾石に略相当する。

佐倉養生所設立 慶応二年の佐倉藩医政改革は(1)藩医から漢方医を廃した(2)医学所の職制改正(3)藩宮の病院ともいふべき佐倉養生所を創設したことである。この設立は尚中が「長崎養生所」をモデルとした。この長崎の養生所は尚中の義弟松本良順等の奔走で文久元年に創建され、尚中の長崎滞在中に開業したものでその全貌を知っていたからであろう。慶応二年十月七日、尚中が一等医師の命をうけた日、養生所取建について尚中に取調を命じ養生所取建迄は医学所で諸事取扱うよう触出され、診療医・薬剤方の人事の基本が出来た。翌三年八月、開業の運びとなり宮崎傳治を養生所総取締に任じ、一等医師の尚中と協議の上、諸事をとりはかることとなった。場所は医学所と同じ場所で麻賀多明神門前の現佐倉保険所の場所である。藩医の薬剤の調査もここで行い(慶応二年現在七名)、藩医外の町医(慶応元年現在、板倉養拙・今井松軒の二名)の薬もここで調査した。診療には毎日一等医師が午前十時より十二時迄、二等医師二名は交互に一等医師同様に出勤、三等医師は毎日二人宛詰め急病人の場合は診療に当り夜中は宿泊し、一・二等医師退出後はその代行として全権を握った。他に職員としては看病人頭取四人、薬剤調査方六人、薬種掛六人、看病人十六人其他の制で当分半減にした部門もある。

以上のような慶応二年の佐倉藩医政改革が齎したものは、従来ややともすれば藩校医学所と順天堂との対立という様子もあったが、これを契機として、診療についてはその懸念が無くなったものと受取れる。この養生所も僅か一年余の開業で閉鎖となった。それは明治戊辰の戦乱の波及で東海道副総督の佐倉入城の慶応四年閏四月を機に同月二七日、財政窮迫もあって当分閉鎖につき、尚中を招きその談があった。そこで同年五月七日、養生所を当分閉鎖については、以来は慶応二年以前の医学所に戻すことを一等医師へ達した。

尚中東京に移る 前記した慶応四年閏四月七日官軍の東海道副総督佐倉入城後、尚中の身边も多事で同月十五日、二日は一泊にて江戸に出、二九日には東征大総督より官軍負傷者の療治を頼まれ、宇都宮辺迄出向いたがここから引返した。何故かはわからないが、堀田藩に祿仕している尚中としては従来徳川氏に対しては陪臣の身分である。また新政府の

薩長に対して心中快からぬものもあって、このような行動となったものであるまいかとの推測もされる。さて戦局は東北にのびていたので六月には再度の命があった。尚中の心境はどうかであろうとも、結局は養子の進が代って慶応四年六月二日奥羽陸軍病院頭取の辞令を陣中でうけ、三春病院から若松城へと出張した。戦乱も収まったが、明治二年八月、太政官より尚中の住所について問合わせがあり、続いて開拓使から尚中呼出状があったが病氣にて出仕出来ない旨を返事した。病氣でもおして出仕するようとの強引な引拔であった。然し結局は十一月になり出京を決意し藩主正倫夫妻にも挨拶し同年十二月には

「其藩佐藤舜海（尚中）儀、被_レ任_二大学大博士_一候間、此旨相達候也 十二月五日 弁官 佐倉藩知事殿」
の達をうけ同年十二月十七日大学東校の大博士（教官の最高位で医科大学長に当る）に任じ、二十有余年住みなれた佐倉を離れ東京に移った。

四 実父甫仙からの教養

甫仙の学問 尚中の実父は下総国香取郡小見川藩の藩医山口甫仙である。甫仙の生れは小見川と利根川を隔てて北岸にある潮来の北條東平の長男である。長じて小見川藩の山口家を嗣ぎ藩医として嘉永三年に逝去したが其間の文政十年（一八二七）尚中が二男として生れた（幼名龍太郎）。甫仙は北條家にあつた時、水戸藩の郷校延方学校で漢学を学びその教養が後に子息の尚中に深い感化影響を与えたものと察せられるので、甫仙が学んだ延方学校の教授陣の儒学の性格の一端を見よう。その儒者の一人は下総津ノ宮の漢学者久保木清淵（号を竹窓）である。清淵はまた伊能忠敬の測量に協力した多才な人であつた。氏は香取神宮への要津たる津宮の旧家の生れである。幼にして松永北溟に学び、長じて程朱の学を主としてまた書を善くした。その有名な著作には補訂鄭註孝経（文化元年刊行・序文は伊能忠敬）がある。次に清淵と忠敬との関係であるが、安永五年より佐原の忠敬は近くの津ノ宮の清淵に漢学を学んだ。時に弟子の忠敬は三十六歳で師の清淵は十九

歳であった。後に寛政四年忠敬が幕命で蝦夷地を測量し同十二年には江戸での測量図及公文書作製に協力し、また全国各地の測量にも同行した場合もある。そのため文政十一年のいわゆるシーボルト事件では忠敬作製の地図や日記は安全と思われて津ノ宮の久保木氏宅に密かに預けた間柄であった(清測の記載については、その直系の子孫である久保木良氏の協力に拠った)この清測・忠敬の学術は甫仙の漢学修業に大きな影響を与え、これがまた父甫仙を通じて尚中に感化影響したと推察される。以上のように清測は単なる漢学者でなかったといえよう。この点は佐倉藩校で儒学を講じ藩学のレベルを高めた石橋亘(号は竹州・天保四年致仕)と類似している。亘もただの儒者でなく、彼の遺稿には大筒の見取図と解説もある。清測と同じく幅の広い碩学である。この清測の学統を甫仙がうけつぎ尚中に影響したと思われることは、今後の実証的研究を期待し、これを解明しなければならない課題ではあるまいか。

新撰年表と尚中、この年表は佐倉順天堂蔵版、逢谷箕作先生(阮甫)閱で著者は佐原の地誌学者清空秀堅(一八〇九—七九)である。この書物の論考については、既に小川鼎三先生が順天堂史上卷(昭和五五)で述べられているが、秀堅は前記した久保木清測・宮本茶村に師事している。そこで清測を介し、山口甫仙が秀堅を知り、それがまた佐倉順天堂塾の泰然・尚中の知るところとなり、一面には泰然は医者たるだけでなく、藩主堀田正睦の外交上の諮問にあずかる程の見識をもっていたことも併せて、この出版が順天堂になったものではなからうか。またこの年表の序を、安政二年水戸の藤田彪が書いているのは、前記の水戸藩郷校延方学校に清測・茶村が、出講していることに関聯があり、泰然・尚中が刊行に関与することになったのではなからうか。筆者の手元にある新撰年表は、黄色の表紙で年表の部分は四五枚と四六枚目には慶応三年迄の四行に年表が印刷され残りは枠が印刷され、追記の用に用意されている。また架蔵の別本に「掌本新撰年表全文久新鐫 東都玉山堂発兌」がある。年表第一頁の初めには袖祢新撰年表と書いている。八・五種に一六種のポケット型和綴で年表の部分は四四枚。この小形のは、皇国・漢土・西洋と三段に分けているのは、前者の普通本も変りは無いが、ただ、この小さい方はスペースが小さいから、一行を二段にして二年分を充てている。年表は文久三年迄を、残りの一枚

は梓のみで大正十年迄を毛筆でよく書きこみして、史実の記載はない。その記事を前書新撰年表に較べると簡潔にした項目のみの抄本であるが相当に普及したようである。

附記 この項の終りに一言したいのは、佐倉時代の順天堂は泰然の実子の系統は別としてもその主軸となったのは常陸国の出身である。尚中の実父は常州潮来の出で、尚中自身も実父の本姓である北城の北を略して佐藤姓を冒す前には城姓を称したことがある。甫仙の実妹ヤスの娘タミは常陸太田の高和氏に嫁し、その息が尚中の養子進である。タミの妹サダは尚中の妻、進の妹トシは佐倉順天堂の方を嗣いだ佐藤舜海(二代目)の妻である。以上のようなことから潮来の北條家を核とし、また同地の延方郷校から久保木清洲による学問が尚中にも大きく影響したこと等、順天堂と常陸との関係は深いものがある。兎に角、尚中は少年期に父甫仙から漢学の影響をうけ、稍長じて江戸に出、儒者寺門静軒に就いて学んでいるが、その緒は清洲の薫陶をうけた父甫仙の許にあった小見川時代にあったと見られる(同地にはその資料は見られないが)。この漢学の教養あつてこそ、後年オランダ語の書物を比較的短期間に読破し得たのも、その教養から生れたものである。

五 尚中の懇意な人

藩校成徳書院奉行の金井右膳 金井氏は堀田氏初期以来の譜代重臣で番頭役を勤め七百石の知行取であった。尚中の蔭の力となったのは善六郎で襲名して右膳という。嘉永二年医学所総管となり、同四年から文久元年迄の十一年間に亘り成徳書院奉行(総裁)となり、藩学を総理した。奉行は二名乃至三名で月番で事に当った。尚中が長崎行の時は丁度右膳の在任中で、尚中の長崎引上げと右膳の退任は同年である。右膳は、漢学の教養の上に書芸にも長け江戸の書家市川米庵の書風は佐倉の上層藩士の中に学ぶ者があり、右膳もその一人である。なお泰然の筆蹟に、米庵晩年の書風が見られるのは、泰然の書にも影響を与えたものと思われる。右膳はまた馬術は將軍家の採用となっていた八條流(高麗八条家馬術)で、嘉

永七年には免許を得ている。右膳の人物伝の大略は右のようであるが、さてここで問題は尚中長崎行について右膳が介在していることである。この長崎遊学について、父の泰然は最初から反対であったが、その間にあって右膳が尚中の力となつたところに重要な意義がある。尚中の長崎行に反対し泰然が憤懣をあらわにしたのは、泰然がこのことで右膳に宛てた二通の手紙に要を尽している(順天堂史上巻、九九七—一〇〇〇頁、同書資料一—二二一、一—二二二)。その反対の理由は、(一)蘭医ポンペの医学は、尚中にとりて益なしと見たこと、(二)遊学の費用が沢山かかるので経済的に困る、(三)尚中が泰然の同意を得る前に、藩の諒承を得てそれを泰然に押し付けて来た、である。そのやり方が甚だ不満である。これらは何れが主因であるとは判じ難い点もあるが、第二の方が主であったと見られる。父泰然の諒承納得を得られないまま、万延元年十一月五日佐倉出発、同年十二月二日長崎に着いた。右記泰然の心中を和げたのは、四十余日後の翌二年二月八日付の松本良順(泰然の実子・尚中の義弟)の手紙で、父が今回尚中の長崎行に反対したのは「父の心中はよくわかるが、このことは順天堂の将来の発展のために当を得てはいない」として諄々と説き、甚だ説得力あるものである(順天堂史上巻資料一〇—二一—二五頁)。このこともあってか、以来は泰然の不満も解消したようである。ここに引用した泰然、尚中の長崎行についての書簡は、十四通を数えるが(筆者所蔵のもの) 文久元年四月十六日付長崎発の尚中自筆、右膳宛のものが最後(現存では)で、尚中一行は翌文久二年三月十四日、佐倉に帰着した。

尚中と富商の大河平兵衛 尚中の前出の書状のうち文久元年四月二七日認の金井右膳宛(順天堂史上・一〇—一七頁)のものの一節に、

「荆妻事、旧冬正月中全不快、……彼婦性質氣儘にて両親之存寄ニも不_レ叶、往々可_レ有_ニ御座候へ共、生死の間ニ至ては夫婦之情不_レ得_レ止所、病状申上不_レ憚、御賢察候段恐入候へ共、貴宅・恩田・續之御三家は小生ニなりかわ里、御配慮被_ニ成下_ニ候段、書状毎々有_ニかた□□□□申越候、小生到て近親方も無_ニ御座_ニ候間、何卒御憐愍之上、小生帰宅まで彼保命罷在候へ、貴宅之賜無_ニ此上_ニ候、勿論彼儀ニ付、入費等之儀は半兵衛被_ニ召呼_レ、飯岡平兵衛方へ御談被_レ下候へ、

早速弁不_レ申候草々頓首」(句読等は筆者)。

註記―前出の恩田は恩田源五兵衛で二百石高、成徳書院肝煎(管務)。續は續徳太郎で聖堂に学ぶ、万延二年より成徳書院教授、一五〇石の知行高。

とある。平兵衛は埴生郡飯岡村の豪農。尚中とは深い交際があったようで、妻サダの病氣養生について金銭上の相談があれば平兵衛に話すよう右膳に洩らしている。この大河家は国鉄佐原廻り総武線の成田駅の次の久住駅北方で数百米の所にあつた。江戸時代以来の在郷商人として大をなした当地方有数の豪農であつた。その家系の概要は文政六年苗字帯刀を許されて大河平兵衛と称したが、その緒は寛政年間以降と見られる。文政十二年には田安領十六ヶ村の寄場組合が近くの磯部村に置かれ、その管内では有力な商人で天保十四年、金貳百両を冥加として上納している。その保護の下に自宅の西方を北流する根木名川に専用の河岸場を設け利根川に出、江戸川を経て江戸との商取引をした。その主たるものは田安家の庇護の下に醬油醸造で江戸に販売した。その一例が安政六年には四九八二樽(六升樽)で代金七五三兩となつてゐる。また米穀の取引を行い、文久二年には佐倉藩の廻米九七〇〇俵を扱つてゐる。このような商工業を経営して財を蓄えていた。平兵衛が尚中に金銭上の融通をしていたと察せられるが、その具体的な史料は未見である。当主の大河保治氏談では、泰然から贈られたと伝える花瓶があり、他にはないという。佐倉藩の年寄部屋日記には、佐倉領(城付)以外の往診等の旅行等にはその都度届けているが、大河氏に関しての記事はない。然し記録には見られないものの、この項の初めに引用した書簡からも尚中と平兵衛の間には深い交際があつたものと推察される。今後の尚中伝調査の一つの課題である。このことは尚中の少年期の漢学の修業、それが父甫仙から影響され、それがまた水戸藩にも関連し、新撰東西年表刊行の問題に及んでいることも同様、今後の尚中伝開明増補の一つの問題点と見られる。